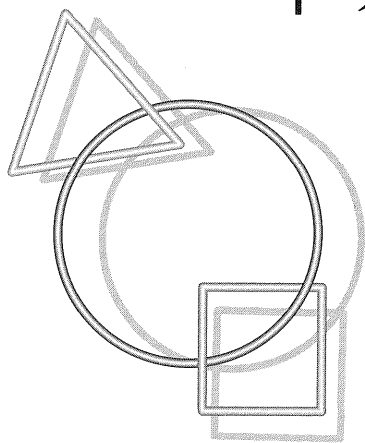


「知恵の輪」と 産学連携



座長・澤田 芳郎

都市と「知恵の輪」

都市には多くの人々が生活している。人々はそれぞれ生産、流通などに従事し、都市内外に製品やサービスを提供する。資本の蓄積は金融を生み、それを支えとして生産も流通も維持される。都市はまた多様なバックグラウンドを持つ人々の出会いを促進し、異なる価値や事物の相互発見とそれによる思考の刺激を通して、新しい文化を結実させる。ここに現れる人々の創造的な関係性を「知恵の輪」と表現することも可能であろう。

社会はそもそも法や制度、慣習を介して人々を拘束するものだが、その人々が一方で社会を構成してもいる。都市における「知恵の輪」は、この相互依存をダイナミックなプロセスに変換する。だから既存の諸制度が行きづまりを呈している現代社会において、「知恵の輪」の意図的構築が期待されるのも当然である。そして大学という知のシステムをそこに組み込む際の手がかりの一つが「産学連携」である。

産学連携と大学

産学連携は産業セクターと大学セクターを本格的に架橋し、それによって「学術研究に基礎づけられた産業活性化」を追求する諸活動の総称である。経済情勢の混迷と国の法制度整備があいまって、一九九〇年代後半以降、実際に共同研究や大学発ベンチャーが活性化しているが、その本質は研究者と産業人の出会い、あるいは大学を介した異業種の

出会いの中で生まれる新しい価値や動きを大事にしつつ、知的創造サイクルを構築することである。

しかし、産学連携には個々の大学をミクロ合理性に閉じ込めかねない側面がある。知的財産権の確保は自律性を与えられた大学にとって重要なテーマであるが、その過度な強調は「知恵の輪」を断ち切りかねない。大学に「産のシステム」としてのふるまいを求めるなら、そこに現れるのは単なる取引である。一方、大学における学問の自由は大学の特権ではなく、社会の承認を得てはじめて成立したものであることを大学も再認識しなければならぬ。大学が蓄積してきた多くの知的資産は、本来社会のものなのである。

「知恵の輪」で産学連携の拡張を

まちづくりの立場で産学連携をとらえるなら、その概念を理工系の研究開発から解き放つ必要がある。とりあえずは「インターネットの利用を前提に大学がメディア機能を強化する」「地域計画や事業計画の立案などで大学がシンクタンク、コンサルタント機能を持つ」などがあげられるが、学生の参画を前提とする産学連携も、教育機能との関わりにおいて大学が社会に開かれるという点で非常に重要である。

さらに、大学の新しい役割として「一般市民からの研究委託に応える」ことも考えられる。市民社会における大学の直接のプレゼンスは、子弟の教育を除くといわゆる市民向け講座が中心であった。しかし情報豊富な現代社会において、その役割は必ずしも大きくない。ここに、市民が自ら重要と考える課題の学術的解明を自己の負担において専門の研究者に委嘱し、研究者もそれに応えるという枠組みが成立する可能性がある。市町村やNPOが課題やリソースの集約機能を果たすことで、大学を社会の中の新たな知の創造の場にしていくこともできよう。

以上のような拡張型産学連携において、大学の役割や大学に専門家を雇用しておくことの意味も明らかになるのではないだろうか。その専門家をいわゆるアカデミシヤンに限定する必要がないことは言うまでもない。こうして「知恵の輪」もまた、再生するのである。



PROFILE

澤田 芳郎 (さわだ・よしろう)

京都大学国際融合創造センター教授。'54年大阪府生まれ。

専門は科学社会学、産学連携論。

同センター融合部門で、産学連携を推進する。